

## 第7回地域づくりセミナー 参加者からのコメント

2017/12/09@名古屋市立大学

当日、会場から頂いたコメントのうち、お答えできなかったものなど、その一部を掲載致します。

### 【稲葉さんへの質問】

- ・セネガルの人たちは、よそ者をどう捉えていると感じましたか？
- ・具体的にどのような問い、返答がありましたか？印象的な出来事があれば、教えて下さい。
- ・よそ者の関わりは基本、期限付きのプロジェクトかと思います。触媒となって起こった変化の持続性を左右するものは？
- ・稲葉さんの活動は、本来地方行政が果たすべきことではないのか？行政参加の実践
- ・行政に専門性と行動力のある方がいるかが、効いてくると思います。
- ・能力・人脈・資源を持っていないよそ者は、どうすればよいのか？
- ・余白を示す。保育の現実で「暇そうにしていること」が最初にすべき仕事だと聞いたことを思い出しました。子どもが話しかけられるように暇そうに。。。
- ・担い手不足についての具体的な対策は？若者参加を促す工夫など何かされていますか？
- ・パウロ・フレイレによる教育について、(知識を伝達する教育と) 問を考え、答えを見出していく教育は両方必要ではないか？先行研究を知らないと独りよがりになる。
- ・稲葉さんは時に風であり、時に雨、時にミミズなのではないだろうか？変わらないのは、森をつくろうとしたいのではなく、良き土壌を作っている。コトが起こっていく土
- ・「プラットパーソンとしてのよそ者」はいかがでしょうか？その人柄から自然と人や情報が集まり、自分自身も変化し続けるという考えを表現してみました。
- ・外にいて変化させ、内にいて変化させ・・・下図のような関係でしょうか？  
内部の変化と相互作用と外部の変化と相互作用の間に立って、行き来するよそ者

### 【中村さんへの質問】

- ・よそ者の限界を超えるために、よそ者ではなくある意味ではよそ者のスタンスを持ち続ける誠意と実践に敬服。中村さんはミミズであり、森にもなれるすごい人だと思った。なぜ小川村だったの？
- ・福島での活動で「こどもの権利を守る」ために、実際に子どもたちの意志を確認する対策はされましたか？
- ・現在住んでいらっしゃる信州の「地域おこし」について、ご自分の中で完成はありますか？その居住は期間限定ですか？
- ・移住を促進するための活動をする必要性を地域おこし協力隊は求められると思いますが、村内での活動と損害への活動のバランスの難しさをどのようにこなしていますか？

- ・外でのイベント参加が行政との絡みもあり、大変と聞きますが、実際はどうでしょうか？
- ・いつまで、ご自身の事を「よそ者」と呼ばれますか？中村さんには名古屋にふるさとがあると思いますが、それが覚悟の限界になりますか？
- ・傍観者ではなぜいけないのですか？後は自分たちでやれ、で良いと思います。
- ・他人事を自分事にする事は自分次第だと思うのですが「他人事を自分事にして下さい」と人に啓発するときに何が大切ですか？
- ・「覚悟」は重いので「気軽な応援団」としてのよそ者や風の人も欲しい。
- ・企業コンサル産業は盛んだが、結局、どう違うのだろうか？オーナーシップ（企業ははっきりしている）と主体の自発性尊重（オーナーシップははっきりしてない。地方自治体か？）
- ・「現地の文脈を無視した（外からの）価値の押し付け」の思索を地元の行政が行おうとすることはなかったのでしょうか？

#### 【共通の質問】

- ・「流れ者」が意図せず、地域を変えることもありますか？
- ・日本に居れば長期にわたって地域に関われるので、新しいプロジェクトも続きやすいが海外の場合、2年で帰らなければならなかったり、人が変わるじゃないですか。海外で自分がいなくなった後も良い方向にかえた「何か」を続けてもらうには、どのようにすれば良いのでしょうか？
- ・「持続性」を担保するための決め手を一つ挙げられるか？
- ・「よそ者」と「住民」の二分法しかないのだろうか？「良く来る人」「関係者」「友人」のような多様なグラデーションはありえないのだろうか？
- ・よそ者にも住民（地域）の立場がある。よそ者としての活動と地域住民としての地域活動とのかかわりに光を与えることが大切では？
- ・よそ者と関係を持つ当事者の間に見出される「相互作用」の形成、中身などからよそ者を（一般化せずに）多様性などを追いかけていくことが必要では？
- ・責任と自由をもたない住民（困っていない住民）はどうするか？
- ・受け入れられるよそ者と、受け入れられないよそ者の差は何だっただろうか？
- ・行政または民間と住民にキーパーソンがいないと、計画も動いていかない気がします。
- ・専門家モデルの“専門”とはいったい何か？

## 話題提供者およびコーディネーターのコメント

稲葉 久之 コメント

話題提供に対して、たくさんのコメントを頂き、ありがとうございました。会場でお答えしきれなかったコメントも含め、一部を共有すると共に、改めてコメントをさせていただきます。

コメントの中に「よそ者が時間限定的に関わる取り組みにおいて、その後の持続性をどのように担保することができるか？続けてもらうためにはどうすれば良いか？」というものがありました。私は「住民（当事者）が納得して“続けない”と判断するのであれば、続けなくてもよい」と考えます。住民の声にじっくりと耳を傾け、問いを投げかけ、状況を把握する。よそ者にできることは人や情報をつなぎあわせることで、住民が判断し担い手となった取り組みを続けるかどうか決めるのも住民であろうと思います。

取り組みには「なぜ、それを行うのか？」という目的があります。その取り組みが課題の解決や理想の実現に有効であるならば、取り組みは続けられるでしょうし、課題が解決し、理想が実現すれば続ける必要はないでしょう。一方、その目的や意味が十分に理解されていないまま、「よそ者の判断」で決定した場合や、よそ者が担い手となっている（当事者が関わらない、またはマンパワーとして参加・動員される）場合は、やはり続かないことが多いと思います。

きっかけはよそ者による介入や声掛けによるものだったとしても、それが地域にとって必要だと判断されたものは、よそ者が居ようが居まいが住民によって主体的に行われるし、続けられています。私の知らない場所でコトが次々と展開していく、取り組みが拡大していく、ということもあります。「みんながやり始めたことに、よそ者が口を挟むなんて野暮」「楽しんでやっているんだから、それで良い」そんなことも生じています。その上で、取り組みが続くポイントは何か？と尋ねられたら、「大切なのは、そこに参加する人が楽しんだり、やりがいを感じたり、想いを持って集まること」ではないかと思います。

『プロセス・コンサルティング』の著者であるエドガー・シャインは「人にできるのは、人間システムが自らを助けようとするのを支援することだけだ」と述べています。当事者の問題を一番理解しているのは当事者です。地域のことは地域に住む住民が一番良く理解しています。「どうすれば持続性のある取り組みができるか？」ではなく、「本当に住民が解決すべき課題だと思っていることは何か？」「実はやろうと思っているけども、なかなか一歩が踏み出せずにいることは何か？」にじっくりと耳を傾け、観察し、議論し、共有し、みつめていくこと、そのための場づくり、きっかけづくりをすることが私の役割ではないか、と考えています。

エドガー・シャイン（2012）『プロセス・コンサルティング』白桃書房

中村 雄弥 コメント

参加者のみなさまから複数のコメントをいただきましたが、特に多かったのは「よそ者と住民の2分法しかないのか?」「よそ者にも多様なグラデーションがあるのでは?」といったご指摘です。私のプレゼンテーションにはやや乱暴な部分があり、「よそ者」か「住民」かを二者択一で選択しなければいけない、というニュアンスが感じられたかもしれません。

みなさまの仰る通り、「よそ者」にも多様な形があり、そのグラデーションを一緒にくたにしてしまうのは、とても乱暴な議論の運びだと思います。後半のディスカッションにおいて、説明を加えたように、多様な立ち位置やスキル、視点を持つよそ者が、その多様性を大事にしながら相互に作用していくことは、地域資源の潜在力を存分に引き出し、可能性を開花させていく過程において必須条件であるように感じます。現地住民が中心にいて、その周縁に濃淡グラデーションある「よそ者」が関わっていくといったイメージです。極端なことをいえば、誰もが「よそ者」性からは無縁ではいられず、「住民」と「よそ者」の線引きは極めて曖昧かつ相対的なもので、厳密に定義することはできないのではないのでしょうか。

大事なのは、言葉遊び的に、「よそ者」の定義を突き詰めることなく、地域には「よそ者」度合いの濃淡多様なさまざまなアクター（住民も含む）がいることをあらためて認め（そういった人たちを「掘り起こし」たり、マッピングする作業も有益でしょう）、その上で、そのアクターたちが相互に作用し、地域活性につながるような有機的な化学反応をたくさん起こせるよう環境整備&仕掛け作りに内外から取り組んでいくことではないかと思えます。もちろん、そういった試みを長く持続させる上では、根性論の意気込みだけではなく、地域内外の人が交流できるフォーラム的な場所・機会を設けたり、継続して関わる意思をもったキーパーソンを増やしたりする努力も併せて必要になってくるのでしょう。

自分の村で言えば、「もともとの住民」や「新住民」としての自分にやれることもあれば、限界もあります。そういったとき、「風の人」たるアカデミックな調査団や外部コンサルタント（通りすがりの観光客や、数年ぶりに帰省に訪れた元住民なども）がもたらす「新しい風」が、自分や地域のみなさんにできないことを補ってくれたり、従来と全く異なる発想で袋小路を突破するヒントをくれるかもしれません。大切なのは「結局、よそ者にはわからない」と安易に回路を閉じ、凝り固まることなく、地元住民の主体性を十二分に尊重した上で、オープンさを失わず、地域の風通しをよくすることだと思います。家を守るには、定期的に空気を入れ替えて、風通しをよくすることが大事です。地域を守る上でも同じではないのでしょうか。自分は、そのことを、今回のフォーラムへの参加を通じて再認識することができました。機会をいただいた主催者のみなさま、ご意見を下さった参加者のみなさまに感謝いたします。

古今東西、「よそ者」というのは、良きにつけ悪きにつけ「住民」に変化をもたらす存在として記述されてきました。コミュニティに禍福や新しい知識・技術をもたらす存在です。そうしたよそ者を定義づけ分類し、地域とのかかわりを記述する作業は、民俗学、人類学、社会学、開発学などの領域において特に熱心に行われてきました。最近では、地域創生の文脈でも語られています。よそ者のもつ特徴のどこに注目するかがポイントで、社会的機能、空間移動、移動パターンなどが切り口となります。

今回のセミナーでは、よそ者の立場の違いを明確化するため、「専門家型よそ者」と「移民型よそ者」に注目しました。これは、日本の社会学者である徳田剛の分類に依っています。徳田は 19 世紀末から 20 世紀初頭のユダヤ系ドイツ人社会学者のジンメルとオーストリア生まれでアメリカへ渡った社会学者シュッツの議論をもとにしています。徳田のいう「専門家」とは、「関わりをもつ当該社会の言語、生活習慣、法や取引のルールに精通していなければ遂行できない」（徳田 2005：8）役割を果たすようなタイプの人間で、「職業に従事するに足るだけの高度なコミュニケーション能力、関係調整能力、客観的で分析的な観察眼をもった存在であり、社会集団のメンバーとの対話に長けているような人々である」とも言っています（同：8）。当該集団からの距離化と同時に当該集団からの何らかの尊敬の感情を抱かれる存在を「専門家モデル」とカテゴライズしました。セミナーではこの意味で「専門家型」を用いています。詳しくは、徳田論文をお読みください。

今回のセミナーで話題提供者となってくれた稲葉さん・中村さんのお二人とも、青年海外協力隊経験者で、その後日本国内で地域づくりに取り組み、国境をまたいだ経験を現在の活動に活かしている方々です。国境の有無にかかわらず、地域の問題をワガコトとし、それぞれの手法で関わっている方々です。グローバルかつローカルな視点で活動している実践者を選定して経験をシェアしていただきたいという思いがありました。お二人の活動方法の相違点を明確化し、検討課題を整理しやすくしようと、「専門家型」「移民型」を一つの切り口としましたが、このモデル化に違和感を覚えた参加者もいたようです。

社会学の理論上では 2 つに大別されるよそ者ですが、現場で起きている実相をつぶさにみると、よそ者の形態は多様であることがわかります。いわば、社会的機能、空間移動、移動パターン、かかわりの動機などの要素の組み合わせのグラデーションであるといえます。

今回のセミナーに参加された方々から寄せられたコメントとして、「よそ者と住民の二分法しかないのか」「かかわり方に多様なグラデーションがあるのではないのか」「受け入れられるよそ者と、受け入れられないよそ者の差は何か」「行政を巻き込む必要があるのではないのか」などに関連するものが多かったように感じています。よそ者の多様性、関係者のグラデーション構造、行政や経済界を含めた支援体制をベースに、よそ者と地元が相互に影響しあって協働・共創していく軌跡は、島根県江津市の事例で詳細に紹介されています（田中 2017：25-45）。また地方創生のトップランナーとして、2014（H26）年度の総務大臣賞を受賞した島根県海士町の「高校魅力化プロジェクト」によそ者としてかかわった岩本悠さんの事例は、

「受け入れられる/受け入れられないよそ者」「行政を巻き込む必要」を考えるうえで示唆に富んでいます（同：11-24）。I ターン者として地域づくりに貢献した岩本さんは、現在は海士町を離れて別の場所から海士町を支援しています。岩本さんは、他集団から訪れて一時的に居住し、また別の集団へと移動する「風の人」となりました。定住しない関わり方の好事例です。筆者で、島根県のローカルジャーナリストである田中さんの特性が活きた、臨場感あふれるタッチで記載されていますので、ぜひご一読ください。

私自身、20 年以上にわたり特定のインドのコミュニティと関わりながら研究をしている身であり、15 年以上インド居住者を配偶者にしたことで生殖家族（選択によって構成した家族）がインドで居住しているわが身を振り返った時、自分のインドへのかかわり方はよそ者か住民かの二分法ではなく、多様なグラデーションの中でしか位置づけられないことを実感しています。社会的機能は「専門家型」ですが、移動パターンとしては「複数地域居住」で「風の人」でもあります。

今回のセミナーで「よそ者」を取り上げ、それを経験豊富な話題提供者のお二人の語りを軸に深く考察できたことで、私自身の家族の在り方、生き方を見つめなおす良い機会にもなりました。参加者のみなさまと貴重な時間と考えを共有できて、本当に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

#### 【参考文献】

- ・ 田中照美（2017）『よそ者と創る新しい農山村』JS 総研ブックレット No.19、筑波書房。
- ・ 徳田剛（2005）「よそ者概念の問題機制：『専門家のまなざし』と『移民のまなざし』の比較から」『ソシオロジ』49（3）、pp.3-18